

日本における葬儀賛美歌のインカルチュレーション

中道 基夫

はじめに

拙稿「日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション(1) —日本メソヂスト教会の葬儀式文—」⁽¹⁾「日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション(2) —日本基督教会の葬儀式文—」⁽²⁾において、アメリカから伝えられた葬儀式文の日本における変化に注目した。その結果、葬儀式文の変化のプロセスを、宣教学的にキリスト教のインカルチュレーションとして評価し、その特徴として、葬儀において「1. 遺族への慰め、2. 天国での平安の約束、3. 神・天国との同化、4. 死を通しての教訓」が強調されていることを確認した⁽³⁾。

本論文においては、葬儀、死、天国をテーマとした賛美歌に注目し、上記の式文のインカルチュレーションの特色が、葬儀賛美歌にも同様に見いだすことができるかを検証する。礼拝式文が主として司式者だけに所有され、司式者によってのみ読まれ、会衆はそれを受身的に聞くだけであるのに対して、賛美歌は会衆が所有し、歌い、積極的に関与するものであるが故に、会衆により大きな影響を与える。また賛美歌は、音楽を通して感性に訴え、キリスト教への回心や信仰の覚醒にも一役を担うものである。さらに式文と違って選択の可能性がある、社会や会衆の死生観の変化の中で受け継がれていくものであり、また逆に消え去っていく賛美歌もある。特に、葬儀賛美歌はキリスト者の中でだけ歌われるのではなく、葬儀に参列しているキリスト者ではない日本人によっても歌われることを考えるならば、葬儀賛美歌の日本文化における出会いと適応が大きな課題となる。賛美歌には、キリスト教の教義を伝え、日本の文化に影響を与えるとともに⁽⁴⁾、日本の文化から影響を受けるというインカルチュレーションの特色が顕著に表れている。

プロテスタント賛美歌集の系譜を大別すると、『古今聖歌集』の日本聖公会系、『讃美歌21』に至る日本基督教団讃美歌委員会系、『新生讃美歌』に至るバプテスト系、『聖

(1) 中道基夫「日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション(1) —日本メソヂスト教会の葬儀式文—」、『神学研究』(関西学院大学神学研究会)、第49号、2002年3月、91-114頁。

(2) 中道基夫「日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション(2) —日本基督教会の葬儀式文—」、『神学研究』(関西学院大学神学研究会)、第51号、2004年3月、165-179頁。

(3) 同上、175-177頁を参照。

(4) 明治時代に賛美歌が日本文化、特に小学唱歌に与えた影響に関しては、手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』、音楽之友社、1999年、11-38頁を参照。また、日本文化が賛美歌に与えた影響に関しては、戸田義雄・永藤武編著『日本人と讃美歌』、桜楓社、1978年を参照。

歌』に至る福音派系に分けられる。前述の拙稿で研究の対象とした『日本基督教団口語式文』に至るまでの式文の変遷との関係を照査するため、1997年に出版された日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21』に至るまでの葬儀賛美歌の系譜を探っていく。その際、直接的に影響を与えたと思われる改革派系、長老派系、会衆派系、メソヂスト系、バプテスト系の賛美歌集の変遷をたどり、葬儀賛美歌のインカルチュレーションの問題について述べる。

1. 日本における賛美歌の歴史と課題

1.1. 日本における賛美歌の歴史

1874年に日本最初のプロテスタント賛美歌集が出版されて以来、各教派において20ないし30曲からなる賛美歌集が編纂された。1890年頃には、300から400曲の賛美歌を収録する歌集が出版されるに至った。

長老派・改革派系の日本基督一致教会は、いくつかの賛美歌集を試作した後、1881年に日本人の委員会によって最初に編纂された賛美歌集『讃美歌 全』を出版した。会衆派の日本組合教会は、1882年に日本で最初の四部合唱形式の譜面付きの『讃美歌并楽譜』を編纂した。その後、組合教会と一致教会の合同の計画が進んだが、実現に至らなかった。しかし、その結果2派共通の『新撰讃美歌』(1888年歌詞版、1890年譜附版)が出版されるに至った。この歌集には263曲の賛美歌が収録されているが、そのうち91曲が日本人による創作であることがその特徴の一つである。

メソヂスト教会では、1884年に『基督教聖歌集』が作られ、翻訳賛美歌と並んで日本人による多くの創作賛美歌も収録された。1895年には『基督教聖歌集』は増補改訂されて、422曲を収めるものとなった⁽⁵⁾。

浸礼教会では、宣教師ネーサン・ブラウン (Nathan Brawn, 1807-1886) が積極的に賛美歌集の編纂に従事し、1896年に『基督教讃美歌』が出版された。ブラウンの影響が強かったため、他教派の歌集に比べて訳詞の洗練度において劣っていると言われている。アメリカの教会の影響を受けて福音唱歌が比較的多く収録されているのもそ

(5) この賛美歌集の編纂において、インカルチュレーションの視点から永井ゑい子や別所梅之助が果たした貢献は大きいといえる。永井ゑい子に関しては、永藤武「讃美歌『天つ真清水』と月一永井ゑい子の伝統的抒情世界」、戸田義雄・永藤武、前掲書、133-208頁を参照。別所梅之助に関しては、永藤武「神の受容とその讃美—別所梅之助の信仰と思想世界—」、同書、29-101頁を参照。

永井は第1版の企画編纂したJ.C. デヴィソンの助手として働いただけではなく、104編にも及ぶ短歌体賛美歌を創作した。その後日本の讃美歌の主流とはなり得なかったが、キリスト教と日本文化との出会いということにおいて賛美歌史上に注目すべき偉業であった。

別所は賛美歌、特に『讃美歌』301番の「天地の神」という訳語は、単に英語からの翻訳ではなく、「唯一神の持つ普遍的原理性を内実に包み込んだ汎神」(同書、100頁)論を表現したものであり、日本的な汎神論とキリスト教唯一神論の出会いの中で生まれてきたインカルチュレーションのひとつであるといえる。

の特徴である。

1900年に超教派の讃美歌委員会が結成され、各派共通の讃美歌集編纂に取りかかった。この委員会には、日本基督教会、日本メソヂスト教会、日本組合教会、浸礼教会並びにディサイプル派の基督教会が加わった⁽⁶⁾。この委員会によって1903年に出版された『讃美歌』には、浸礼教会の『基督教讃美歌』、日本メソヂスト教会の『基督教聖歌集』、日本基督教会と日本組合教会共通の『新撰讃美歌』から全体の4分の3にあたる讃美歌が収録され、さらに新しく翻訳、創作されたものが加えられた。この後、『讃美歌』(1931)、『讃美歌』(1954)が出版されているが、曲・詞とも大部分は『讃美歌』(1903)を継承するものであり、『讃美歌』(1903)は日本の讃美歌史上で一応の完成を収めたものであるといえる。しかし、1997年には近年の讃美歌研究を踏まえた抜本的な改訂が行われた『讃美歌21』が編纂され、日本の讃美歌集は新しい展開を迎えることとなった。

1.2. 讃美歌の課題

『讃美歌』(1903)の特徴として、日本的叙情性が挙げられている。原恵が「『讃美歌』全体的に日本的叙情性と自然神学的表現が強く、また曲の面でゴスペル・ソングが多く採用されたことによって全般的に叙情的、主観的、日本的な傾向の強い歌集となった。これはいわば讃美歌の持つ意志的、客観的、聖書的な面が一步後退したと言える」⁽⁷⁾と述べているように、『讃美歌』における日本的叙情性は否定的に評価されている⁽⁸⁾。

諸国の讃美歌集の例に漏れず、『讃美歌』も編纂当時の社会的影響を強く受けていることは否めない。原が『讃美歌』における日本的叙情性の原因として「国粹的、富国強兵政策の遂行の結果、教会はそれまでの独立と自由の精神を奪われ、保身のために国家の文教・宗教政策の中に組み込まれざるを得なかったことや、教会内にも日本的キリスト教の主張が強まってきたこと」⁽⁹⁾を挙げているのは、日本基督教団設立に至るまでのプロセスとあわせて理解するならば、十分考えられることである⁽¹⁰⁾。

(6) 日本聖公会は直接この讃美歌集の編纂には加わらなかったが、協議委員を送り、日本聖公会の『古今聖歌集』と『讃美歌』との間に約3分の1の共通訳の歌を収録する協定を実施した。

(7) 原恵・横坂康彦共著『新版 讃美歌』、日本基督教団出版局、2004年、211頁。

(8) 竹内信は、日本の教会で愛唱されている《わがよるこび、わがのぞみ》(『讃美歌』<1954> 527番)の訳詞に対して、「あまりにも抒情的な訳し方」(竹内信『讃美歌の研究』、日本基督教団出版局、1980年、458頁)であると批評し、「古今の日本の抒情文学に通暁する国文学者がおのが好むところに従ってこの翻訳をなしたのであろう」(同書、458頁)と分析している。また、日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌略解 前編 歌詞の部』(日本基督教団出版局、1954年)においても、全般的に感傷的な訳詞に対して同様に批判的な評価がなされている。

(9) 原・横野、前掲書、212頁。

(10) 日本基督教団讃美歌委員会は1995年10月に公にした「『讃美歌』の歴史におけるわたしたちの責任」において、過去の日本の教会の歩みを批判的に検証し、『讃美歌』が戦争讃美や国粹主義的な美文調の傾向を持っていたこと、『讃美歌』の歴史と内容を歴史的反省の上で立って見直さなければならないことを表明している。

2. 葬儀賛美歌の変遷と特徴

2.1. 葬儀賛美歌の変遷

まず、一致教会の『讚美歌 全』(1881)には、特に「天国」「死」「葬儀」といった項目が設けられていない。しかし、その歌詞から葬儀や死を意識したものであると推測される賛美歌がある⁽¹¹⁾。組合教会の『讚美歌并楽譜』(1882)の目次には、「死」をテーマとした賛美歌として、3曲(106、107、109)が挙げられている。その後、両教会によって編纂された『新撰讚美歌』(1890)は17曲を「基督教徒の死」(197-207)「天国」(208-213)のテーマのもとに分類している。

メソヂスト教会の『基督教聖歌集』(1884)には、「永世死亡復活」(183)「永世浮生」(184-186)「死亡復活」(187-190)「永世審判」(191)「永世天国」(192-225、228-233、330)と分類された賛美歌が49曲収録されている。改訂された『基督教聖歌集』(1895)には、「短命」(361-366)「死亡復活」(367-376)「審判」(377-378)「天国」(379-415)と分類も改められ、55曲が収められている。

浸礼教会の『基督教讚美歌』(1896)には、「現世及び永遠」(296-299)「死」(300)「審判」(301)「天国」(302-316)の21曲が収録されている。

これらの賛美歌集をもとに作られた『讚美歌』(1903)には、「勝利の教会」というテーマのもと「死」(330-339)「天国」(340-357)という区分が設けられており、またそれとは別に「雑」として「埋葬」(363-368)という区分もあり、34曲が掲載されている。その改訂版である『讚美歌』(1931)は、「永生」という大きなテーマのもと「死」(473-488)「葬式」(483-488)「天国」(489-504)、また「雑」の中に「死」(560、562)「天国」(560-565)が設けられており、40曲を有している。第2次世界大戦後、大幅に改訂された『讚美歌』(1954)には「永生」の中に「死」(470-474)「葬式」(475-480)「天国」(481-490)の21曲が収録されている。根本的な改訂を経て出版された『讚美歌21』(1997)は、礼拝で使う賛美歌集を強調して編纂されたため、「葬儀」(107-112)は「II 諸式」の中に入れられ、「死・よみがえり・永遠の生命」(569-575)は「VII 終末」というテーマの中に組み込まれている。また、『讚美歌』(1954)までの葬儀賛美歌はほとんどアメリカの賛美歌の翻訳であったが『讚美歌21』では中世の東方教会のものやドイツなど様々な国の葬儀や死に関する曲が取り入れられている。『讚美歌21』(1997)には葬儀や死に関する歌が13曲収録されており、従来の『讚美歌』と比べて大幅に削減されているように見える。しかし、実際には1990年に日本基督教団信仰職制委員会によって試案として出版された『新しい式文』の葬儀式文に則り、巻末に「枕頭の祈

(11) 天国や死をテーマとしたと思われるものが歌集の最後に15曲(89-103)収録されている。これらの曲以外にも、『たのしきくには、天にあり』(62)や『わがふるさとのすみかは』(75)等も葬儀や死をテーマとした歌といえる。

り」から「記念会」に至る葬儀諸式の中で歌われる賛美歌が68曲列挙されている⁽¹²⁾。『讚美歌21』は、従来の『讚美歌』と比べて選曲や構成、用い方が刷新された全く新しい賛美歌集であるといえる。

上記の賛美歌集の中で、明治時代の賛美歌集から『讚美歌』(1954)まで受け継がれてきた賛美歌は、《なおしばしの》(A few more years shall roll, 171)⁽¹³⁾、《イエス君にありて》(Asleep in Jesus! Blessed sleep, 477)、《こころおだやかに》(How blest the righteous when he dies, 471)、《うきよのたびゆく身は》(I'm but a stranger here, 475)、《真玉しらたま》(Jerusalem the golden, 484)、《とうときわが主よ》(Jesus, while our hearts are bleeding, 473)、《ややに移りゆきし》(My latest sun is sinking fast, 476)、《なつかしくも》(One sweetly solemn thought, 482)、《あまつみくには》(There is a happy land, 490)、《はるかにあおぎ見る》(There is a land that is fairer than day, 488)の10曲である。『讚美歌21』(1997)まで続いているのが、このうち《イエス君にありて》と《はるかにあおぎ見る》の2曲である。

この明治時代の賛美歌集から現代の『讚美歌21』まで残っている2曲に注目し、他の曲にも言及しつつ、葬儀賛美歌の歌詞に表れている特徴を明らかにしていく。

2.2. 葬儀賛美歌の特徴

2.2.1. 《イエス君にありて》(Asleep in Jesus! Blessed sleep)

この曲は、ある墓石に記された“Sleeping in Jesus”という言葉からヒントを得て、マーガレット・マカイ (Margaret Mackay, 1802-1887)によって作詞されたものである。1832年に出版された *The Amethyst; or Christian's Annual* に収録されて以来、葬儀・埋葬の賛美歌として広く歌われるようになった。

表1(次頁)を見ると、まず英語から日本語に翻訳された時点で、いくつかの変化を見ることができる。もちろん、英語の場合は韻を踏む必要があるので詞の内容がそれに影響され、さらに日本語に訳す場合、日本語の音節と音符への割り振りの関係から原歌詞をそのまま訳することは非常に困難である。そのことを考慮しつつ、英語の賛美歌が日本語に翻訳される中で起こっている変化に注目したい。

原歌詞の主題は、「死よ、お前のとげはどこにあるのか」(I コリント15:55)という聖書の言葉を背景に持つ2番の “That death has lost his venomed sting!” (死はその

(12) 日本基督教団讚美歌委員会編『讚美歌21』、日本基督教団出版局、1997年、1000頁を参照。また、『讚美歌21』では、「葬儀が私的な悲しみに閉じこもるのではなく、共同の祈りとして行われる」ためのふさわしい賛美歌を葬儀賛美歌として選曲している。日本基督教団讚美歌委員会編『讚美歌21略解』、日本基督教団出版局、1998年、84頁を参照。また、この考えの背景となった葬儀に関する理解や式文については、日本基督教団信仰職制委員会編『新しい式文』、日本基督教団出版局、1990年、138-160頁、234-240頁を参照。

(13) 賛美歌の曲名もしくは初行は賛美歌集によって変わっているので、『讚美歌』(1954)の初行を基準とし、《 》内に記し、()内には原歌詞の初行と『讚美歌』(1954)の番号を記す。

表1 《イエス君にありて》(Asleep in Jesus! Blessed sleep)

	Margaret Mackay 1832	基督教聖歌集 1884、1895	讚美歌 1903、1931	讚美歌 1954	讚美歌21 1997
1	Asleep in Jesus! Blessed sleep, From which none ever wakes to weep; A calm and undisturbed repose, Unbroken by the last of foes.	イエスのみ民らの 眠りのさきはひ かなしきうきよに またとはめさめじ	イエス君にありて 寝ぬるぞやすけき この世のうれひに またとはめさめじ	イエス君にありて 眠るこそよけれ ひとの世の憂さに またとはめさめじ	眠れ、主にありて。 憩え、主のみ手に。 さまたぐる者は いずこにもあらじ
2	Asleep in Jesus! Oh, how sweet, To be for such a slumber meet, With holy confidence to sing That death has lost his venom'd sting!	イエスのみ民らの 眠りぞ楽しき 死にも恐れじと 勇みたためれば	イエス君にありて 寝ぬるぞ楽しき 死のはりはいづこ 歌いつつ憩わん	イエス君にありて 眠るこそよけれ 死のはりはいづこ 歌いつつ憩わん	眠れ、主にありて。 憩え、主のみ手に。 われらいざ歌わん、 「死のとげいづこ」と。
3	Asleep in Jesus! Peaceful rest, Whose waking is supremely blessed; No fear, no woe, shall dim that hour That manifests the Savior's power.	イエスのみ民らの 眠りぞやすけき めさむるみ国に 悩みはためれば	イエス君にありて 寝ぬるぞ幸なる 恐れも悩みも み顔をかくさじ	イエス君にありて 眠るこそよけれ くもきりもやみも み顔をかくさじ	眠れ、主にありて。 憩え、主のみ手に。 まかせたるものに 恐れのかげなし。
4	Asleep in Jesus! Oh, for me May such a blessed refuge be! Securely shall my ashes lie And wait the summons from on high.	イエスのみ民らの 眠りのごとわれ み声を待ちつつ 安くあらまほし	イエス君にありて 寝ぬるぞ嬉しき 安らかに臥して み声をこそ待つ	イエス君にありて 眠るこそよけれ 安らかに臥して さむるときを待つ	眠れ、主にありて。 憩え、主のみ手に。 主は覚ましたもう、 とこしえの朝に。
5	Asleep in Jesus! Far from thee Thy kindred and their graves may be; But there is still a blessed sleep, From which none ever wakes to weep.	イエスのみ民らの 身はへだたるとも 魂もて会う国に 楽しく住むべし	イエス君にありて さむるぞよなき 再び会ひ見て みもとに喜ばん	イエス君にありて さむるこそよけれ したわしきものと 相見て喜ばん	

毒を持つとげを失った!) であり、死は祝福された眠りであり、死がもたらす恐れや悲しみの克服が歌われている。その意味では、『讚美歌21』108番が最も原歌詞に忠実な翻訳をしていると言える。

しかし、他の日本語訳では、確かに死に対する勝利は歌いつつも、5番において「再び会ひ見て、みもとに喜ばん」「したわしきものと、相見て喜ばん」と、キリストの再臨の時に親しき者と再会すること、その喜びが強調されている。『讚美歌21』が再会に言及していないことにより、むしろ他の日本語訳における再会の希望が際だっている。原歌詞でも親しき者に対する言及はあるが、その再会を望み、その約束を喜ぶ言葉を見いだすことはできない。祝福された眠りの中にあることが歌われ、“From which none ever wakes to weep”(誰もその眠りから涙をもって目覚める者はいない)という復活の時の希望が語られている。

2.2.2. 《はるかにあおぎ見る》(There is a land that is fairer than day)

サンフォード・ベネット (Sanford Filmore Bennett, 1836-1898) によって作詞され、天国を歌った福音唱歌として知られている曲である。代表的な福音唱歌のスタイルを持ち、もっともよく歌われた曲であった⁽¹⁴⁾。日本でも葬儀の中でよく歌われる曲の一つである。

(14) 『讚美歌21』、前掲書、86頁を参照。

表2 《はるかにおおぎ見る》(There is a land that is fairer than day)

	Samuel Fillmore Bennett 1868	基督教聖歌集 1884、1895	讚美歌 1903、1931、1954	讚美歌21 1997
1	There is a land that is fairer than day, And by faith we can see it afar; For the Father waits over the way, To prepare us a dwelling place there. In the sweet by and by, We shall meet on that beautiful shore, (refrain) In the sweet by and by, We shall meet on that beautiful shore.	はるかにおおぎみる かがやきのみくにな みかみのそなへにし たのしきすみかあり (くりかえし) われら いまに かがやけるおかにて またも ともと きみのみまへにあわん	はるかにおおぎみる かがやきのみくにな ちちのそなえましし たのしきすみかあり (くりかえし) われら ついに かがやくみくになて きよきたみと ともにみまえへにあわん	信じて仰ぎ見る はるかなるふるさと 主の備えたまいし 永遠の住居あり (くりかえし) やがて われも 輝く御国にて 聖き民と 共にみ前に立たん
2	We shall sing on that beautiful shore, The melodious songs of the blessed, And our spirits shall sorrow no more, Not a sigh for the blessing of rest.	かがやくそのおかに うきもなやみもなく たのしきこえあはせ ともにうたわん	かがやくみくになて うきもなやみもなく たのしきこえあはせ たえずともにうたわん	主の愛わきあふれ 祝福身に余る 過ぎにしわが日々は すべて主のあわれみ
3	To our bountiful Father above, We will offer our tribute of praise, For the glorious gift of His love, And the blessings that hallow our days.	ゆたかなるめぐみの ちちをこそたたへめ このみにあまるまで うけにしさちのため	ちちのあいあふれて さいわいみにあまる ゆたかなるめぐみを とこしへにたたへなん (とこしなえにたたえん 1931、1954)	悩みも悲しみも ことごとく消えゆき わが胸に満つるは 神の賜う平和
4			(1895のみ) ときはのあまつよに ともにあひたへなん いまぞゆくみくにな たのしきすみかあり	み恵に感謝し み名をほめたたえて み国に入る日にも 声の限り歌わん

この歌の日本語訳においても、原歌詞の中ではそれほど強調されていない天国における再会が大きなテーマとなっている。天国における再会を強調している歌は、他にも《うき世の旅ゆく身は》(I'm but a stranger here, 475)、《きよき岸辺に》(We shall reach the summer land, 489) 等が挙げられる。いずれの曲においても、「あいの友のともに集う」「愛でにしものと やがてあいなん」と、死後の世界としての天国における親しい者との再会が希望として歌われている。これは単に天国における再会を意味するものではない。植村正久が作詞した《去りにしひとを》(479) において「去りにしひとをしのぶれば、ともにしたしみ むつびたる ありしすがたは みえねども、たまはいかでか 消えぬべき」と歌われているように、生前の死者との関係が死を超えて存続することをも含意している。しかし、『讚美歌21』111番では、死後の再会のモチーフが若干訂正されており、「聖き民と、共にみ前に立たん」と訂正されていることは、注目に値する。つまり、親しい者との再会に対する希望ではなく、「神の前に共に集う」という終末における礼拝への希望へと強調点が移っているのである。この様に『讚美歌21』は原歌詞のモチーフを表現しようとしており⁽¹⁵⁾、その変化は明治時代の賛美歌や『讚美歌』の葬儀賛美歌が天国における再会をテーマとしてきたことを際立たせている。

(15) 同上、86頁を参照。

2.3. 再会の場所としての「岸」と「ふるさと」

その再会の場所が、《はるかにあおぎ見る》は「輝きのみ国」「おか」として、またそこにある「たのしきすみか」「永遠の住居」という具体的なイメージをもって表現されている。「天国における住まい」という考えは、「わたしの父の家には住む所がたくさんある」(ヨハネ14:1-2)というイエスの言葉に由来するものであるが、終末におけるキリストの再来によってもたらされる神の国ではなく、現世と共時的に存在し、上下の関係にある空間化された死後の世界としての天国のイメージが前面に出ている。原歌詞の中にも、天国と地上を上下関係でとらえ、“land”、“a dwelling place”、“on that beautiful shore”という言葉で具体的な場所のイメージが語られている。しかし、原歌詞ではその場所が問題ではなく、そこで神が何をし、人間がそれにどのように答えるかということが問題となっている。それに対して、日本語詞では「たのしきすみかあり」「うきもなやみもない」という表現で、空間の存在とその内容が強調されている。

また、英語の“shore”が、日本語では「おか」⁽¹⁶⁾「み国」と訳されていることは興味深い。聖書の中に、天国を“shore(岸)”として表現している言葉は見いだせない。黒沢真理子の研究⁽¹⁷⁾によると、アメリカで墓地改革が行われる以前には、墓地を神聖な場所と見なす考えはなく、生活の一部であった⁽¹⁸⁾。それが、1830年代から生活圏から離れた場所に自然を際立たせた美しい景観を持つ田園墓地が作られることにより、田園墓地が「死者のための終の住処」⁽¹⁹⁾と見なされ、宗教的にも法律的にも「時間も空間も超越した永遠の『聖地』」⁽²⁰⁾として確立されることになった。また、ピューリタンの影響として、死を常に意識することによって、人生の質を高め、また信仰への覚醒が求められると同時に、死後の天国における平安を強調する楽観的な死生観を経験する場として、美しい景観を持つ田園墓地がアメリカ全土に広まっていった⁽²¹⁾。美しい墓地は、復活の時を待たずして、亡くなった家族や友人との交感の場となり、聖地巡礼とも言える墓参りという新しい習慣が生み出された。この田園墓地という物理的な聖地創造に大きく貢献したのが、地形的な特徴を持った「川」であると、黒沢は主張している⁽²²⁾。「川」は人生を象徴するものであると同時に、空間を二つに分割するものであり、聖と俗とを隔てる役割を果たしていたため、川岸に田園墓地が作られた。この様な19世紀アメリカの田園墓地という新しい聖地の創造が、葬儀賛美歌に影響を与えているのではないだろうか。そうであるならば、原歌詞の“We shall meet on that

(16) この場合の「おか」は平地の中の小高い丘ではなく、海もしくは川に対する陸地を意味するものであると思われる。

(17) 黒沢真理子『アメリカ田園墓地の研究 生と死の景観論』、玉川大学出版部、2000年。

(18) 同上、169頁を参照。

(19) 同上、173頁。

(20) 同上、173頁。

(21) 同上、3-4頁を参照。

(22) 同上、175頁。

beautiful shore” が具体的なイメージを持っていると言える。

日本においても「川」は生と死の境界線として理解されている⁽²³⁾。「川」や「岸」が日本で使われる場合、アメリカでの田園墓地のイメージから離れて、生と死の境目を表す「川」やあの世を示す「彼岸」へと変わっていることが想像できる。葬儀の中でよく歌われる《きよき岸べに》(489) では「きよき岸べに やがて着きて」と歌われるが、原歌詞は “We shall reach the summer land” となっており、“the summer land” が「きよき岸べ」と訳し変えられているところに、日本人の彼岸観が前面に現れてきているのではないだろうか。この曲は、内容が親しい者との天国での再会を待ちこがれる感傷的なものであるために、葬儀で好んで歌われる⁽²⁴⁾。

次に、再会の場所として表現されるのが「ふるさと」である。『讚美歌』(1954) には、「あいの友の ともにつどう あめこそわが ふるさと」(《うき世のたび》475)、「永遠とこしえの故郷ふるさと」(《ややに移りきし》476)⁽²⁵⁾、「ふるさと、ふるさと」(《なつかしくも》482)等の表現が見られる。いずれの歌も明治時代から引き継がれているものである。これらの言葉は、原歌詞では “Heaven is my home” (475)、“my immortal home” (476)、“my home” (482) と表現されており、「ふるさと」が “home” の訳語として使われていることが分かる。

この言葉は、「わたしたちの本国は天にあります」(フィリピ3:20) に由来するものであり、天国こそ帰るべき「ふるさと」であるという意味が込められている。しかし、19世紀に作られた賛美歌の中で “home” と表現されているものと、日本語で「ふるさと」と訳されているものでは違いがあるのではないか。特に、これらの賛美歌が作られた19世紀には、他にも多くの賛美歌で “home” という言葉が使われている。それは単に生まれ故郷や家族を表すだけではない⁽²⁶⁾。“home” は、19世紀のアメリカ・ピューリタンの影響を受け、個人主義化した宗教観のもとでの「キリストを中心とした最小の集まり」⁽²⁷⁾、「小さな教会」“Little Church”⁽²⁸⁾、つまりキリスト教社会の中の真に信仰に生きる小さな集まりを意味するものである。それが葬儀賛美歌の中で

(23) たとえば、文学の中でも隅田川は生と死の境界線としての役割を果たしている。「川がこちら側と向こう側とをへだてる境であることから、現世と来世の境、此岸と彼岸との境などとして見なしてきたこともその一つである。しかも、隅田川のように、実際に『伊勢物語』などでも有名な、武蔵国と下総国との境を流れる川である場合、ますます人々の川に対する境界としての意識は強まってくるであろう。隅田川は、梅若丸の亡霊が登場するのにふさわしい、この世とあの世の境であったといえるのではないだろうか」(戸川点「梅若伝説」、すみだ郷土文化資料館編『隅田川の伝説と歴史』、東京堂出版、2000年、27頁)。回向院が、無縁の人々の亡骸を葬るようにと隅田川の東岸に建てられたのもこのような理解に基づくものであると思われる。

(24) 『讚美歌略解』、前掲書、265頁。

(25) この曲はアメリカの賛美歌集には全く見られず、『新撰讚美歌』(1888) 以来日本でのみ歌われているものである。同上、258頁を参照。

(26) 手代木、前掲書、113-122頁、209-212頁を参照。

(27) 同上、114頁。

(28) Campbell, Donald P., *Puritan belief and musical practices in the sixteenth, seventeenth and eighteenth centuries*, Southwestern Baptist Theological Seminary, 1994, p. 400.

は、“home”の理想像が天国に投影されて、神の前で真に信仰に生きる世界を“home”と表現されているのではないだろうか。

一方日本語での「ふるさと」は、いま生きている世界から望郷するかつて生まれた世界である。帰るべき場所であり、「ふるさと」は、受け入れられ、安らぐ場所である。「あの世」や「常世」の心象風景としても用いられるイメージでもある。葬儀賛美歌の中で歌われている「ふるさと」は、この世に対立し、またキリスト者が目指すべき場所としての「本国」ではなく、この世の苦しみから解放され、神に受け入れられる受身的な世界、そこで愛する者と再会がゆるされる場所である。日本の葬儀賛美歌の中では、原歌詞の信仰による勝利や栄光のイメージはなくなり⁽²⁹⁾、むしろ「ふるさと」に受け入れられ、そこに在ることのできる平安が語られている。

3. 葬儀式文のインカルチュレーション

上述した、葬儀式文の変遷の中に見られたインカルチュレーションの特徴「1. 遺族への慰め、2. 天国での平安の約束、3. 神・天国との同化、4. 死を通しての教訓」が、葬儀賛美歌の中にも見られるのであろうか。

まず、「死を通しての教訓」は、葬儀賛美歌の中には明確な形では見いだすことはできない。賛美歌が、式文や説教と違って、感性に訴えるものであるが故に、教訓的なモチーフは弱まり、むしろ「1. 遺族への慰め、2. 天国での平安の約束、3. 神・天国との同化」が叙情的に表現されている。

「遺族への慰め」は、式文では遺族のためのとりなしの祈りという形で表現されていたものが、葬儀賛美歌においては「天国における死者との再会」という具体的なイメージをもって表現されている。英語の葬儀賛美歌の中に死者との再会を願うものがないわけではない。また、そのような感情があることは否定できない。しかし、日本人の彼岸観やあの世観に適応する「岸」「ふるさと」という言葉が用いられることによって、日本的叙情性が高められ、神の前に立つこと、また信仰による死に対する勝利よりも「天国における死者との再会」への喜びが強調されている。これは具体的な再会ということよりも、植村正久の《去りにしひとを》(479) に表れていたように、生者と死者との関係性の永続を表すものである⁽³⁰⁾。

(29) 例えば《うき世のたび》(I'm but a stranger here, 475)の原詞の中にある、“I shall be glorified”や、《ややに移りし》(My latest sun is sinking fast, 476)の“My triumph is begun”“gives me victory”という表現はなくなっている。

(30) 文化人類学者の波平恵美子は、日本人は、人は死んでも「死者」として存在し、生者と何らかの形で関係を持っていると考えていると主張している。「死者」は生前と同じように感情や感覚を持ち、それを損なわないように「生者」によって葬儀が行われている。波平恵美子『日本人の死のかたち』、朝日新聞社、2004年。特に「第2部『死者』とは何者」46-82頁を参照。それゆえ、「生者」が「死者」と天国で再会するという喜びをもって生きるということは、両者の関係を表現する上で重要な役割を果たすと思われる。

さらに、《はるかにあおぎ見る》(488) の繰り返し部分の「ともにみまえにあわん」が、『讃美歌21』111番では「共にみ前に立たん」と訳し変えられているように、従来の賛美歌集では、天国において、また終末に神に相對し、復活の喜びに満ちて礼拝することや、神の前で裁きを受けることよりも、自分たちが受け入れられ、その中に平安を得ることに喜びを見いだしている。「ふるさと」という言葉が用いられ、日本的叙情性をもった空間的イメージとともに「神・天国との同化」という希望が語られている。

『讃美歌21』は、この様な日本的叙情性を克服し、キリスト教信仰の強調を試みている⁽³¹⁾。また、『讃美歌21』の葬儀賛美歌には「ふるさと」「岸」という表現や、天国での再会に関する描写はなくなっている。それに対して葬儀に関連する賛美歌として、「復活」をテーマとした賛美歌が多数挙げられ、葬儀のテーマとして「復活」が前面に出てきている。『讃美歌21』は日本の葬儀賛美歌に新しい流れをもたらせたことにおいて、日本の賛美歌史上意味のあるものであるといえる。しかし、賛美歌自体も多様化する中で、この様な変化をどのように評価するかは、もう少し時間を経なければならぬであろう。

おわりに

以上、日本における葬儀賛美歌の変遷とそこに表れたインカルチュレーションの特徴を明らかにした。そこで、葬儀賛美歌の日本的な叙情性や感傷的な表現をどのように評価するかということが問題になるであろう。前述したように、『讃美歌』における日本的叙情性は、国家主義的発想に対する反省に立って、またキリスト教信仰との齟齬という面においても、これまで否定的に評価されてきた⁽³²⁾。叙情性は自分自身が許容されているという安らぎを与え、現状を受け入れる力にもなり得るが、その現状を打ち破り、新しい現実へと向かっていく力にはなり得ないという一面をも持っている。

しかし、葬儀賛美歌が特定の状況の中で歌われることを考えるならば、必ずしも叙情性を否定的に評価することはできない。むしろ理性的・教義的な内容は、愛するものの死の悲しみに耐え、またその死を受け入れなければならない状況において、その直接的な役割を果たすことができないのではないかと考えられる。日本基督教団讃美歌委員会は、葬儀賛美歌のあるべき姿として、「死という現実の中で、『悲嘆と寂しさ

(31) 『讃美歌21略解』、前掲書、86頁、「111 信じて仰ぎみる」の解説を参照。

(32) 「日本的感傷がキリスト教信仰よりも強く出ている嫌いがあり、明治時代の讃美歌に共通な欠点が認められる」。『讃美歌略解』、前掲書、257頁。

の中から、公同的な信仰のあかしへと引き上げられるようにしなければならない』⁽³³⁾と述べている。この定義そのものに関しては異論はないが、死の悲嘆から信仰の告白へと導かれるためには、時間とそれにふさわしい儀礼的プロセスが必要である⁽³⁴⁾。葬儀の中において叙情性豊かな歌が歌われ、理性ではなく感性に働きかけることも必要である。グリーンワークの観点から見て、従来の日本的叙情性を持った葬儀賛美歌は一つの役割を果たしている。賛美歌の受容ということでは、日本的な叙情性を含んだ歌が日本人キリスト者に受け入れられ、それらが愛唱歌となり、その人々の信仰を支えてきたというのも事実である。

日本の場合、グリーンワークはさまざまな死者儀礼を通して行われている。そのグリーンワークのプロセスの中で課題が変わってくるように、賛美歌においても感性に訴える言葉から徐々に復活の希望へと導かれるようなバリエーションが見られるべきである。今後さらに日本の葬儀賛美歌がインカルチュレーションしていくためには、欧米のキリスト教葬儀にはない死者儀礼、また緩やかなプロセスによる死の受容に同伴する葬儀諸式の充実とその儀式にふさわしい日本独自の賛美歌が必要である⁽³⁵⁾。

(33) 『讃美歌21略解』、前掲書、84頁。『 』は『讃美歌21略解』の筆者による、新しい式文、前掲書、138頁よりの引用。

(34) 葬儀の研究において、日本人は死の受容において、ゆっくりとしたプロセスをたどることが主張されている。新谷尚紀『死と人生の民俗学』、駿台曜曜社、1995年、30-46頁を参照。

(35) 横坂康彦は、日本の賛美歌の展望として、「日本語による創作讃美歌を増やす以外に方法はない。(中略) 本来、日本の教会の実情に即した讃美歌がわたしたちの方法論で生まれてくることこそが望ましいのである」と述べている。原・横坂、前掲書、264頁。